
仮面ライダー大戦ガンバライド Episode「DEGAUL」.壮絶ライダー大戦 ログ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー大戦ガンバライド Episode「DEGAUL」
・壮絶ライダー大戦

【Nコード】

N0018W

【作者名】

ロゲ

【あらすじ】

この小説は「仮面ライダー大戦ガンバライド」を読んでから読むことをお勧めします。なぜなら、この小説から読むと、いろいろ理解できなくなるからです。

8月下旬。

俺はその瞬間、レイを裏切った。

ケンタ達の夏休みにいったい何が？

今、新たな牙が襲い掛かる・・・。

（前書き）

この小説は「仮面ライダー大戦ガンバライド」を読んでから読むことをお勧めします。なぜなら、この小説から読むと、いろいろ理解できなくなるからです。

8月下旬。

あと一週間で夏休みが終わるという頃。

ケンタ「荷物はこれでよしと・・・。」

レイ「なにやってるんですか？」

ケンタ「え？これは、ガンバライド合宿の用意だよ。」

ガンバライド合宿なんてものは存在しない。

俺はその瞬間、レイを裏切った。

その日の夜中。

俺は、町を走ってる。

一人で。

小さなリュックを背負って俺は駆け出した。

翌日。

レイ「ケンタ様？どこですか？」

レイは必死に俺を探していた。

俺はレイの家にはいない。

そのとき、俺はある家の前に立っていた。

ホコリかぶった表札のホコリをはたく。

ここは十数年前に住居人がいなくなつた家。

俺は、その家の中に入っていた。

そして、表札にはこう書いていた。

「桜坂」と。

俺はこの家の住居人でもあった。
鍵を開けて中に入った。
とても懐かしい場所だ。

俺は、そんな懐かしい記憶に触れ合うためにここに来たわけじゃない。

崩壊した研究室に用があったのだ。

研究室の場所ぐらい、勘でわかる。
勘でそこにたどり着いたのだから。
そこには、壊れた機械などしかない。
でも、そんなものは関係ない。
俺はある資料を探すだけだ。

俺を改造人間にした張本人の記録を探すのだ。

やっと見つけた記録。

その記録にはこう書いてあった。

学名：G a u l l

モチーフ：ゴリラ 狼 虎

特徴：ゴリラの性能を混合させたことにより、暴走の悪化を防ぐ。

狼と虎の混合で人間を超える力を持つ。

これだけだった。

俺の父さんは何をしたかったのだろうか。
俺を改造したりして。

その時、俺は頭痛が響いた。
ケンタ「ガアアアアアアアアアアグウガアアアアアアアアア

「アア！」

頭痛が治まった。

しかし、痛かった頭に、闇が染みこんでいた。
破壊を好む、無敵の闇が――。

新学期に入った。

レイ「・・・ケンタ様。どこにいたのでしょっか・・・？」

亜由美「ケンタがいないの？どうして？」

レイ「急にいなくなってしまうて・・・。一週間前から・・・。」

亜由美「訳わかんないよ。でもあいつのことだから大丈夫じゃない？って・・・なに？あの騒ぎ。」

少しはなれたほうで少しもめごとがあった。

カイト「ケンタ・・・だよな。」

コウジ「うん。」

イブキ「お前、どうした？」

ケンタ「どうもしてねえよ・・・。」

俺は、復讐の第一歩としてこいつらを潰すことにした。

ケンタ「変身。」

「カメンライド デイガウル」

ケンタは、変わっていた。

元々茶髪だった彼の髪は、金髪に変わっていた。

ケンタ「変身。」

「カメンライド デイガウル」

コウジ「そうか・・・。俺達とやるってか。変身！」

イブキ「はあああああっ！変身！」

カイト「お前の態度にイライラするんだよお！変身！」

デिवオルバーと威吹鬼と王蛇が目の前にはいる。

デイガウル「最初はこれだ。」

「カメンライド エターナル」

俺は、エターナルに変身した。

俺は短剣でデिवオルバーたちに攻撃していく。

デिवオルバー「はあ！」

威吹鬼「てやあ！」

二人の射撃がとても痛い。

しかし、俺はその攻撃をマントで防ぎ、攻撃を気にせず、王蛇に攻撃する。

王蛇「こいつ・・・強い！ぐわああ！」

俺は王蛇の体制を崩した。

そして、とどめをさした。

王蛇の変身を解除した。

後はあの二人だ。

「アタックライド クレーンアーム」

俺は、バースの武器を腕につけ、二人に攻撃した。

「アタックライド ブレストキャノン」

「ファイナルアタックライド ババババース」

「セルバースト」

デイガウル「はあああああ！」

これで、威吹鬼は倒した。

デिवオルバー「なんてやろうだ・・・！」

「アタックライド シュートベント」

ゾルダのシュートベントがデिवオルバーの肩に取り付けられた。

デिवオルバー「はあっ！！」

爆発が俺を襲う。

「フォームライド オーズ プトティラコンボ プテラ！トリケラ

！ティラーノ！・プ・ト・ティラーノ・ザウルース！」

俺は、あのプトティラコンボに変身した。

「アタックライド メダガブリュー」

「ファイナルアタックライド オオオオーズ プ・ト・ティラーノ・ヒッサーツ！」

そして、俺はちまちまと戦うのがめんどくさかったので、一気にバズーカ攻撃でディヴォルバーを倒した。

俺は、変身解除した。

ケンタ「貴様らなど・・・過去の遺物に過ぎない。もう、あの頃とは違うんだ！！」

レイ「ケンタ様——いいえ、ケンタ！！なんてことを！！」

私は、怒りが込み上げてきた。

その瞬間を声にした。

レイ「ケンタ！！なんてことを！！」

俺はそんな声を聞いた。

今まで聞いたことないぐらい、怒っているレイの声が聞える。

ケンタ「貴様など、論外だ！覚えとけ！！——アドベント。」

「アドベント」の一言で、ミラーワールドから、ドラグフォースが出現した。

俺は、それに乗って、学校から去った。

亜由美「——死ね。」

そのころ、亜由美はつぶやいた。

「ファイナルアタックライド ギャギャギャレン」
ディガウル「バアアアアニング・・・ディヴァアアアイド！
！！」

777「きゃあああああああ！！」
ギラファ「あああああああ！！」

ディガウル「その程度か。」

俺は、次々とこの世界のライダーを始末していく。

残り、4人。

G5「なんで・・・なんでこんなことを！」

「ファイナルアタックライド パパパンチホッパー」

ディガウル「最悪は——。」

俺は、ジャンプした。

そして——

ディガウル「最高なんだよオ——！」

G5「ガアアアアア！」

G5はライダーパンチで倒れた。

ディガウル「知れ！これが、グレートゲキレッツアタックってやつだ
！」

残り、3人。

エッジ「とりゃあ！」

ディガウル「甘い！」

エッジ「なんだとお！」

ディガウル「弱い！」

「ファイナルアタックライド キキキックホッパー」
ディガウル「ライダー・キック——！」

ライダーキックが命中する。

エッジ「あああああ！」

ディガウル「せいぜい地獄を楽しみなあ——！」

残り、2人。

亜由美「やっと——見つけた。」

俺の後ろには亜由美がいた。

デイガウル「へえ・・・自分から死にに来るんだね!!!」

亜由美「もう・・・許さない。変身!」

「クロノスフォーム」

亜由美は仮面ライダークロノスに変身した。

デイガウル「へえ・・・なら、これだ!」

「カメンライド イクサ」

デイガウル「一気に決める!!!」

「ファイナルアタックライド イイイクサ」

デイガウル「そりゃあああ!」

クロノス「きゃああああ!」

クロノスは変身解除された。

——変身解除されただけだった。

デイガウル「まだ生きている——?なぜだ?」

体から血をすごいほど出している亜由美。

俺に擦り寄ってきてこう言った。

亜由美「ケンタ——、本当にケンタなら——ケンタなら——
こう伝えたいよ。好きだよって——。本当に——、ずっと一緒に
いたい——、でも——こうやって——殺したのは——ケ
ンタなりのフリ方なんですよ——でも——あきらめない——私は
——私は——」。

最後に何かを言おうとした。

しかし、好きって言葉を死ぬほど聞いた俺は、亜由美の腹を殴った。

デイガウル「——死ね。」

残り、1人。

レイ「——きつと、間違いですよね・・・。」

ディガウル「最後の一人・・・キヴァイアアアアアアアア！どこにいるんだああああああ！」

レイ「ここよ！」

ディガウル「早く変身して闘わせろ！そして——死ね！」

レイ「変身。」

俺が倒す最後の的^{てき}——。

手加減はしない。

キヴァイア「はあ！そりゃあ！」

キヴァイアはパンチしてくるが、俺をそんな軽い攻撃で——。

ディガウル「止められるのか？？」

キヴァイア「きゃああ！」

俺は、手から衝撃波を放った。

キヴァイアは吹っ飛ばされた。

ディガウル「もう終わりだ！」

「ファイナルアタックライド ディディディディガウル」

俺の手は黒いオーラに包まれた巨大な手と化した。

ディガウル「ヘル・・・クロオオオオオオ！」

ズガアアアアアアアアアアアアン！

キヴァイア「あ・・・ああ・・・ああああああああ・・・

。。」

キヴァイアは何かを喋ろうとしたが、すぐに倒れてしまった。

ディガウル「へへっ！こんなもんか——っ！！！」

この世界のライダーをすべて倒し、喜んだ俺を後ろから、何かが攻撃した。

????? 「俺を忘れるな！！！」

ディガウル「ぐわあああああああ！」

その攻撃があまりにも強かったせいで、俺の体は耐えられなかった。そして、地面に倒れてしまった。

ディガウル「何者だ・・・！」

「????俺の名は、仮面ライダーディザーク。またの名をプロト・ディフォースとおうか。」

ディガウル「なんだとお・・・!」

ディザーク「俺の弟子・・・いや、ディヴォルバーが俺に助けを求めたからな・・・。そしてお前は、桜坂宅の中でさまよっていたお前のクローンの魂に取り付かれたんだ。」

ディガウル「魂・・・?」

ディザーク「そうだ。魂だ。ディフォースのシステムを製作する際、装着者であるお前の命を奪うのはさすがのタカシも気が引けたようだ。だから、試しにお前のクローンを1体作った。しかし、研究員が眠りについた際、同時期に研究されていたセルメダルとコアメダルをクローンが吸収し、グリードとなった。そして、その時、研究所で唯一のライダーだった俺が始末したんだ。そして、やはりクローンも心を一応持っているから、その魂がいたっておかしくないだろう?」

ディガウル「確かにな・・・。」

ディザーク「そして喜べ・・・。体を回復させてやる。あと、時間を逆戻りにさせてやる。2011年の8月1日に飛ばしてやる。」

ディガウル「うがああああああああああ!」

俺は、急に力が抜けた。

レイ「ケンタ・・・ケンタ・・・、目を覚まして・・・。」
レイの声が聞えた。

ケンタ「あ・・・レイ・・・、ここは・・・。」

レイ「家・・・だよ。」

ケンタ「あ・・・。」

俺は、俺とレイの部屋（同じ部屋です！！）にいた。

レイ「ずっとここで寝ていたんだよ？」

ケンタ「レイ・お前、喋り方変わったな。どうしてだ？」

もしかしてクローンじゃないのか？

レイ「いつまでも、ケンタ様なんていつてられないじゃないですか。」

「
ケンタ「ま、信じとこう。きっとレイだからな。」

夏休みが再び始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0018w/>

仮面ライダー大戦ガンバライド Episode「DEGAUL」. 壮絶ライダー大戦

2011年11月16日12時02分発行